

和歌山市・紀の川市地域公共交通活性化・再生総合事業

事業期間
20～22年度

廃線の危機を乗り越え、再生に向かっている貴志川線においては、地元自治体、商工会、学校、そして住民団体と事業者との相互協力により様々な取り組みを行っているが、今後の少子化の進行や沿線道路の整備という逆風に立ち向かうため、地域とのより密接な連携による持続可能な発展のための更なる活性化と増収策を協議し、実現することを目的とする。

【和歌山電鐵貴志川線・地域公共交通活性化再生協議会】

和歌山県・和歌山市・紀の川市・和歌山県立和歌山東高等学校・和歌山県立貴志川高等学校・和歌山商工会議所・貴志川町商工会・貴志川線の未来をつくる会・和歌山の交通まちづくりを進める会(わかやま小町)・和歌山市民アクティブネットワーク・和歌山電鐵株式会社

事業の概要(20年度)

※数字は事業費

①魅力ある車両への改装 (35,195千円)

貴志駅の猫の「たま」駅長をモチーフに、既存車両を「たま電車」として内外装を改造—「たま」型シルエットの背もたれ、猫足のベンチ、外には101匹の「たま」…という、あっと驚く内装、外装に



②サイクルアンドライドの整備 (2,448千円)

遊休地を活用して岡崎前駅に70台の駐輪場を整備(アスファルト舗装・照明設置等)従来は狭い通路上に40台を駐輪



●活性化イベントの実施

③「たま電車」デザイン発表祭(365千円) : 「いちご電車」との綱引き大会、大掃除大会などの体験イベント、④⑤駅クリスマスイルミネーション、クリスマス電車(65千円) ⑥「たま電車」デビュー記念貴志川線祭り (219千円)



20年度 導入 への プロセス

H18年の開業時から毎月、増収や課題の克服に向けての意見・情報を交換してきた運営委員会のメンバーにより本協議会を立ち上げ、従来の定例会議を拡大する形で協議を行った。

連携計画は、電鐵単独では実現困難なものを中心に、法定計画に移行した。これらを当初3年内に実施予定、将来の検討事項とに分類することで、参画者の実現過程イメージを容易にした。

貴志川線を全国に幅広く認知してもらうことが成功の鍵と考え、地元特産をモチーフにした「いちご電車」、地元おもちゃ会社をスポンサーにした「おもちゃ電車」といったシンボル車両、貴志駅長に任命された猫の「たま」をリンクさせ、きめ細かな広報を重視した。

協議会の取組の他、沿線住民団体、商工会、学校、企業等と電鐵との連携による地域独自の取り組みを複合的に進めた。スタンプラリー(県観光連盟)、駅の大掃除大会(住民団体)、「貴線祭」(高校生)、いちご電車でいちご狩り(障害児施設)、ギャラリー電車(小学校)、他多数。

貴志川線存続の大きな原動力となった住民団体「貴志川線の未来をつくる会」(沿線住民を中心に会員約2,100名)の月2回の会合に電鐵社員も出席し、利用者の視点から見て感じたアイデア、要望から苦情まで生の声を聴き、その場においても共に活性化策や改善策を本音で話し合い、実行している。

初年度の 効果

利用者の大幅な増加

H20年度の貴志川線利用者数:219万人(前年比3.5%増)、事業譲受の前年度(H17年度)比では14%増となり、従来の長期凋落傾向に歯止めをかけ、且つ利用者的大幅な増加につながった。

潜在需要の掘り起こし

②岡崎前駅付近には短大と県立高校があり、近年の駅付近の市街化調整区域の解除もあり宅地開発が進んでいる。従来駐輪スペースがなく、通路上への駐輪を余儀なくされていたが、駐輪場を整備し潜在需要の喚起と、利便性向上による電車利用の定着に貢献した。現在の利用率は約9割前後で推移。

マイレール意識の高揚

①「たま電車」は、鉄道ファンや猫愛好家のみならず誰もが笑顔になれる、全国でただ一つの電車として、広く貴志川線を知って貰うことができた。また、改装費用のサポーターを広く一般の方々に募集した処、1,943件、1,370万円もの応募があり、マイレール、マイルレイン意識の醸成に大きく役立った。
運行開始からの3ヶ月間の前年比較でも、定期外の乗車人員で7.4%増、また第二の収入の柱であるグッズ販売では86%増という大きな実績が得られた。

初年度の 効果

④ 貴志駅および伊太祈曽駅において、手作りのクリスマスイルミネーションの飾り付けを住民団体(未来をつくる会)と一般のボランティア、そして電鉄社員の約25名で行った。材料は沿線自治体(紀の川市)、デザインは沿線学校(貴志川高校)美術部生徒が協力し、マスコミを通じ広くPRされ、住民のマイレール意識の醸成にも貢献した。

⑤ 電鉄社員がサンタに扮し、抽選に当たった子供たちにクリスマスプレゼントを配る企画に、定員100名に対し595名に上る応募があり、たいへん喜ばれた。住民のマイレール意識の醸成、公共交通への親近感に繋がり、今後も継続して実施する予定の一方、抽選に外れた多数の方に何らかのサービスを行うことで貴志川線利用につなげる可能性について、次回以降の課題となった。

マイレール意識の高揚

⑥「たま電車」デビューに合わせ、貴志川線運営委員会の主催により「貴志川線祭り」を開催。和歌山県より前年10月に勲功爵の称号も送られた駅長「たま」も「ニャー」と開会宣言し、「たま電車」お披露目の車内見学会のほか、ミニ電車の運行、バンド演奏、バルーンアートや屋台など、本協議会の構成員らにより数多くのイベントが行われ、約7,000人が参加し大盛況となった。当日の様子はマスコミでも大々的に取り上げられて広く周知され、その後の春休み、ゴールデンウィークには大混雑となる程の訪問客を貴志川線に集めた。

貴志川線運営を軸に地域と連携し、 沿線の魅力も巧みにPRしながら 参加者を増やして活性化を図る。

想定以上の利用者が連休等に集中し、非常に混雑したことで、住民団体に支援頂くも電鉄側のマンパワー不足が浮き彫りに。駅長「たま」をひと目見んと貴志駅には自家用車で訪れる人が後を絶たず、狭い駅前が大混雑。

これには、沿線のP&R用駐車場の再整備と一層の周知などの対策が必要であり、経済効果11億円とも言われた駅長「たま」の効果を、本来の目的である公共交通の実際の利用促進につなげていかなければならない。

広報のタイミングを計り、内容も工夫を凝らした結果、TV、新聞、雑誌等のマスコミの取材が相当数に上った。

協議会の構成員もそれぞれ幅広く積極的にPRし、多方面への周知を図った。JR西日本の提案により、JR近郊各駅で貴志川線のイベントをPRするなど、支援の輪が広がる。

沿線の神社や公園への案内看板やパンフレットが不足しており、電車や猫の駅長だけでなく沿線の魅力をPRしていくためにも、早期の整備が必要。

21~22年度にかけて、中間の伊太祈曽駅トイレの水洗化等の改装、駅周辺案内板の設置、また沿線パンフレットの整備を行う計画となっている。

次年度 以降

長引く不況や新型インフルエンザ、高速道路料金の値下げなどにより、利用実績は本来の潜在需要を下回っている。地域の公共交通機関として交通弱者を含む住民に等しく足を確保していくため、今後もより一層の綿密な需要分析や利用促進策の展開を図り、地域との協働を数多く積み重ねることで、意思疎通の図れる身近で、なくてはならない存在、として貴志川線を捉える意識の向上に寄与していく。